

小学校国語教科書のなかの『古事記』

―『小學國語讀本 卷十一』『第十二 古事記の話』の教育意図―

土 佐 秀 里

はじめに

現在、学習指導要領の全面改定が進められている。小学校および中学校の学習指導要領は、平成二十年三月に公示され、平成二十三年四月より順次実施される運びとなっている。今次改訂のうち、国語科について注目すべき特色は、やはり小・中学校の課程において古典教育の重視の方針が打ち出されたことであろう。しかし、特に小学校課程においては、これまで古典教育の実践が殆ど行われてきていないため、具体的な教材選定や教育実践の方法については、全く未知の領域に属すると言っても過言ではない。

新学習指導要領の小学校・国語を見てみると、「伝統的な言語文化に関する事項」として、一・二年生では「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」が、三・四年生では「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること」と「長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと」が、五・六年生では「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の

文章について、内容の大体を知り、音読すること」と「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること」が、それぞれ定められている。しかし学習指導要領が定められて以後の戦後の小学校教育課程では、こうした実践は殆ど行われてきていない。むしろ意識的に避けられてきた面すらあると言えるだろう。

だが、戦前の国定教科書の時代には、小学校においても文語文の教材が使用され、また古典文学作品についての解説文などが教材として使用されていた。今回の改訂内容は、国定国語教科書の内容にきわめて接近していると見ることができだろう。古典教育の低学年化が有効であるのかどうか検討するためにも、かつての国定国語教科書の内容を実証的に再検討する必要があると考えられる。

本稿はその一端として、第四期および第五期国定教科書に掲載された教材文「古事記の話」（第五期では「古事記」と改題）の内容について検討を加え、その教育意図と、歴史的位置付けについて論じるものである。

一 『小學國語讀本』（サクラ読本）の「古事記の話」

昭和八年度入学の一年生から使用が開始された第四期国定国語教科書『小學國語讀本』（通称「サクラ読本」。以下この通称を用いる）の巻十一には、「古事記の話」と題する教材文が載っている。巻十一は尋常小学校六年生を対象とした教科書であり、昭和十三年二月に発行され、同年四月から使用されたものである。その六三頁から六八頁にかけて「第十二 古事記の話」が掲載されている。

なお、第五期国定国語教科書（通称「アサヒ読本」。昭和十六年使用開始）の『初等科國語 七』『第二十 古事記』も、この「古事記の話」とほぼ同一の文章である。既習の神話教材に言及した箇所若干の変更を施し、漢字表記を改め、「古事記」と

改題されて採択されている。

「サクラ読本」が発行される前年（昭和七年）には、井上準之助・團琢磨・犬養毅の暗殺が相次ぎ、「満州国」の建国が宣言されている。「サクラ読本」が使用され始めた昭和八年には、小林多喜二の虐殺、国際連盟脱退、京大滝川事件、佐野・鍋山の「転向」声明といった事件が続いている。そして卷十一発行の前年（昭和十二年）には日中戦争が始まり、南京大虐殺が起こった。「古事記の話」はこうした時代状況のなかで新教材として出現したのである。

十五年戦争期の学校教育の場において、古事記および日本書紀の神話が、さまざまな機会に「国体」や「皇室」や「日本民族」の聖化と顕揚に利用されてきたことについては改めて説明するまでもないだろう。当該「古事記の話」もまた、そのような思想教育に資する役割を期待された教材であったことは、容易に想像がつく。だが、国語教材「古事記の話」には、軍国主義的な思想教育教材という枠組みだけでは捉えきれない特質が存する。

「サクラ読本」の新機軸のひとつに「萬葉集」（卷十二・第十五課）や「源氏物語」（卷十一・第四課）といった代表的な古典文学作品の概説やダイジェストの教材化ということが挙げられる。「古事記の話」は、そのような新しい傾向を有する教材のひとつであると考えられる。この教材文は太安万侶が古事記を「書きあらはす」ことの「苦心」に主眼を置いており、古事記を一箇の創作物として捉えようとする立場を示していると見ることができる。従って「古事記の話」には古典教育という観点と同時に、文学教育という観点からも検証すべき側面があると考えられる。

また、「古事記の話」において話題の中心になっているものが「文字」であることにも注意を向ける必要がある。そこでは「言傳へ」や「日常使ふ言葉」と「文字」との差異に対する認識が喚起され、また「漢字」と「片假名」「平假名」の差異に対する認識も喚起されている。「古事記の話」には言語教育教材としての側面がかなり大きなものとしてあると考えられる。従って、言語教育という観点からも当該教材を検証する必要がある。

以下、教科書の編纂意図と教材の内容についての分析を、固定観念や先入観にとらわれずに、できるだけ多角的に行って

いくことにしたい。

二 「サクラ読本」の性格と歴史的位置

「古事記の話」の本文を検討するに先立って、まず「サクラ読本」全体の特徴や位置付けに触れておくことにしたい。

先述した通り、この国定第四期の時代は、満州事変に始まり、五・一五事件や二・二六事件などを経て日中開戦へと至る動乱の時期であり、軍国主義が急速に台頭した時期であった。学校教育にもそのような時代の空気はただちに影響した。昭和八年には「教員赤化事件」が起こり、多数の教員が検挙された。翌九年には国会で英語の授業時間を削減すべきだとする意見が提出され、英語の時間削減や廃止に動く学校があらわれた。またこの時期文部省は、国民精神文化研究所（昭和七年）・思想局（同九年）・教学刷新評議会（同十年）・教学局（同十二年）等を次々に設置し、「教学刷新」を合言葉に思想統制を強化してゆく。そして昭和十二年には『國體の本義』が刊行され、多くの学校で修身の副読本として使用されるとともに、入学試験に必須の教養とされるに至る。周知の通り、『國體の本義』その他の思想教育においても、記・紀の神話はつねに活用された（もちろん記・紀そのままではなく、都合のよい内容に改変されている）。

昭和八年から十三年にかけて刊行された「サクラ読本」が、こうした時代状況と無縁でいられるはずはなかった。「サクラ読本」は、大正童心主義の色彩が濃いとされる第三期読本（『尋常小學國語讀本』通称「ハナハト読本」と較べると神話教材と軍事教材が増加しており、国家主義的傾向が強められている。この点を批判的にとらえるなら、軍国主義教育に加担した国語教科書という否定的評価が下されることになる）。

しかし、国語教育史の領域では「サクラ読本」に対する評価は決して低いものではない。というのは、この読本の編纂を

担当した図書監修官の井上赳の理念や姿勢が評価されてきたからである。井上は外遊して欧米の教科書事情を視察し、その成果を「サクラ読本」に傾注した。昭和十二年、「サクラ読本」刊行の途上において井上は「いはば讀本編纂のコペルニクスの轉回が來たのである」(『小學讀本編纂史』⁽¹⁾六二頁)と自ら編纂の指揮を取る新讀本を自賛している。そこでは、入門期における「單語法」から「文章法」への轉換、發達心理学を応用した教材の「發生的展開」、「實科の綜合」から「文學」教材への轉換、図版に「彩色畫」や「寫眞凸版」を採用したことなどが「サクラ読本」の新機軸として紹介されている。こうした井上の理念を重視する立場から言えば、「サクラ読本」の位置付けは、「たまたま時勢が、国家主義体制に急転回していく局面に際会したため、このサクラ読本の内容も、本来文學讀本であろうと意圖したにもかかわらず、上学年に進むに従い、国粹主義的、国民精神作興の方向に傾斜していかざるをえなかつた」⁽²⁾と、両義的に概括されることになる。

もちろんこの概括に対しては「文學」的であることが「国粹主義的」であることに對置されうるのかどうかという根本的な疑問も残るのだが、いまはその点は問題にしない。ここで検討しておきたいのは、「サクラ読本」が「文學讀本」を意圖していたという点である。この讀本の「文學」性については、その当時既に賛否両論的になっていた。⁽³⁾そして、たしかに井上赳自身がこう明言しているのである。

寧ろ讀本は國語獨自の立場を持して、教材を言語・文學に限定すべきである。英國をはじめ獨逸・佛蘭西が、小學讀本に於て大體自國文學の史的展開にまで編纂を擴充し、古典文學を上級の教材としてゐるのは、まことに羨むべき状態である。

(『小學讀本編纂史』六八頁)

さらに井上は、「サクラ讀本」について、

昭和を代表する新讀本は、少くとも材料の選擇及び表現に於て、常にそれが文學たるべきことを目標とし、單なる實科内容の記述たることを避け、何等かの意味に於て國家的・人生的生活と交渉する相を切取つて表現することを念としてゐる。

(同六八頁)

とも述べており、強く「文學」を志向した教材選定を行おうとしていることが窺える。ただし、後者の引用文における「文學」が「生活」を表現するものとして捉えられていることは注意される。これは「生活綴方」の考え方を強く意識した発言と見ることができよう。井上は「唯文學といつても所謂純粹文學に限るべきでなく、國家・社會・人生・文化を抱合する廣い意味の文學を或程度まで選ぶ必要がある」（同六八頁）とも述べており、かなり広い範囲の言語活動を「文學」と呼称していることが窺える。つまり井上の「文學」教育構想とは、言語教育や文化教育を（さらには生活教育を）必然的に抱え込むものであつて、決して芸術至上主義的な文学教育を意図したものではなかったということである。

後述する通り、「古事記の話」も「文學」教材を意図して掲載されていると考えられるが、井上の考える「文學」という概念がかなり幅の広いものであることは念頭においておくべきであろう。

三 教材「古事記の話」の内容とその検討

さて、本稿が検討の対象とする「古事記の話」は巻十一の六三頁初めから六八頁四行目にわたって掲載されている（一頁は二十二字×十一行）。本文は千二百字強の長さで、九つの形式段落に分かれている。『小學國語讀本綜合研究』の指導例（大野靜担当^①）ではそれを、①全文の要約、②阿禮の苦心と功績、③安萬侶の苦心と功績、④古事記の價值、の四段構成にまとめている。また、後藤金好による読み方指導例（昭和十三年^⑤）では、①古事記の成立、②古事記の内容、③古事記の意義、の三段構成にまとめている。何れにしてもこの文章の中心的話題は古事記という書物の成立過程にあり、稗田阿礼と太安万侶という二人の人物に焦点が当てられているところに特色がある。

古事記成立の経緯を語る資料は、その「序」以外にはない。従つて、この「古事記の話」も記述内容の多くを古事記序文

に負っている。

古事記序の内容は、①神代以来の歴史の回顧（古事記全体の要約）、②天武朝における古事記撰録の発端、③元明朝における古事記の完成、という三段構成になっている。「古事記の話」は右の第二段と第三段の内容を踏まえて記述されている。稗田阿礼が「記憶力の非凡な人であつた」（六三三頁）という説明や「當時二十八歳の若盛りであつた」（同前）といった記述は記序第二段に拠るものである。

また、記序には阿礼が「帝皇日繼及先代舊辭」を「誦習」したとあるが、この「誦習」については、天武天皇が語る旧辭を阿礼が聴き取って暗誦した（本居宣長『古事記傳』二之卷、序文の解）という解釈と、漢字で書かれた旧辭を古語に訓読した（平田篤胤『古史徵』一之卷夏、古史二典の論下）という解釈があり、昭和初期にはこの二説がともに有力視されていた。^⑥「古事記の話」は阿礼の行為を「我が國の正しい古記録を読み、古い言傳へをそらんじ始めた」（六三三頁）と記述しており、暗誦説と訓読説の両者に配慮していることが窺える。

なお、阿礼が「今ではもう六十近い老人になつた」（六三三頁）とあるのは、篤胤の『古史徵』に「此和銅四年には五十八歳になむ成れりける」とあるのに従つたと思われ、さらに「此の人がなくなつたら、我が國の正しい古傳、つまり神代以来の尊い歴史も文學も、彼の死と共にほろびてしまふかも知れないのであつた」（六三三―六四頁）とあるのも、やはり『古史徵』に「阿波禮此の大御代に、此の御舉の無からましかば、古事記なる御故事は、阿禮が命ともろともに、亡せはてなましを」とあるのに着想を得ていると思われる。この「古事記の話」が宣長一辺倒ではなく、かなり篤胤の影響を受けているらしいことは注目しておいてよからう。ただし、阿礼を「彼」（この指示語は本来女性に対しても用いるが）や「老人」と呼称している点からは、篤胤の阿礼女性説には従っていないことが窺える。

「古事記の話」の第三段落（六四頁）に「勅命の下つたことを承つた阿禮は、今や天にも上る心地であつたらう」とあるのは言うまでもなく記序には存在しない記述である。このあたりの記述は記序の「撰録稗田阿禮所誦之勅語舊辭」に対応し

ているが、この一節に対する解釈も一通りではない。昭和初年において有力な注釈書であった次田潤『古事記新講』（大正十三年）は、この時すでに阿礼は故人となっており、天武朝に作成された「稗田阿禮所誦之勅語舊辭」の書物だけが遺されていたと解している。だが「古事記の話」は次田説を採らず、宣長以来の解釈に拠って、阿礼が語る「古傳」を太安万侶（なお「サクラ読本」の最初の版ではオホノに「大」字が宛てられていたが、のちに「太」字に改められた）が筆録したと述べている。後述するように、この教材文においては、阿礼の「声」と安万侶の「文字」の対比に国語教材としての眼目が置かれており、阿礼が元明朝に生存して古事記を完成させるという過程が是非とも必要であったのである。

そして第三段落の後半から、「古事記の話」全体（五十七行）の半分以上の分量（約三十行）を費やして、安万侶の「苦心」が縷述される。その「苦心」とは「我が國の古語を、漢字ばかりで其のまゝに書きあらはすこと」（第四段落、六四～六五頁）であった。この記述は記序の「然上古之時言意並朴、敷文構句於字即難」に対応する。次いで、第五段落の記述、

試みに、今日若し片假名も平假名もないとして、漢字ばかりで、我々の日常使ふ言葉を書きあらはさうとしたら、どうなるであらう。「クサキハアヲイ」といふのを漢字だけで書けば、差當り「草木青」と書いて満足せねばなるまい。しかし、これでは、漢文流に「サウモクアヲシ」と讀むことも出来る。そこで、ほんたうに間違なく讀ませるためには、「久佐幾波阿遠以」とでも書かねばなくなる。だが、これでは又あまりに長過ぎて、讀むのかへつて不便である。

（六五頁）

は、記序の「已因訓述者、詞不逮心。全以音連者、事趣更長」が言わんとするところを、具体例を挙げてわかりやすく説明したものである。教科書執筆者の工夫が感じられるところであり、同時に、この教材の教育的意図が込められた箇所だと見ることができる（この点については後述する）。さらに、第六段落の記述に、

安万侶は、いろいろの方法を用ひた。例へば、「アメツチ」といふのを「天地」と書き、「クラゲ」といふのを「久羅下」と書いた。前者は「クサキ」を「草木」と書くのと同様であり、後者は「久佐幾」と書くのと同じである。「ハヤスサ

ノヲノミコト」といふのを「速須佐之男命」としたのは、「草木」と「久佐幾」と二つの方法を一しよにしたのである。

(六六頁)

とあるのも、記序の「是以、今或一句之中交用音訓、或一事之内全以訓録」に基づいて、例を挙げて説明しなおしたものである。ただし、記序が訓字主体表記を基本におくことを主張しているのに対し、「古事記の話」は専ら音訓交用表記の説明に終始しているという差異が見られる。これは当該の教科書文が古事記の〈非―漢文〉性を強調しようとする意図を有していることのあらわれだと考えられる。そして第七段落(六六―六七頁)の記述もまた、記序の「并録三卷、謹以献上」「和銅五年正月廿八日」を基にしている。このように「古事記の話」全九段落中七段落までが古事記成立の経緯に筆を費やしており、その記述がおおむね記序に基づいていることがわかる。

さて、続く第八段落にはこうある。

天の岩屋、八岐のをろち、大國主命、天孫降臨、二つの玉等の神代の尊い物語を始め、神武天皇や日本武尊の御事蹟、其の他古代のすべての事が古事記にのせられて、今日に伝はつてゐる。

(六七頁)

この記述は、二年生から四年生までの間に既に学習した教材を生徒に思い出させて、それが古事記を典拠とするものであることを再認識させようとい意図したものである。すなわち、「天の岩屋」(巻五・二課)、「八岐のをろち」(巻五・五課)、「白兔」(巻四・十六課)、「少彦名のみこと」(巻五・十三課)、「天孫」(巻五・二十一課)、「二つの玉」(巻五・二十五課)、「神武天皇」(巻六・一課)、「日本武尊」(巻六・六課)、「弟橘媛」(巻七・二課)の各教材が右の記述に対応する。このように段階的・発展的に配列された各教材が相互に連環を保ちつつ組織的な体系を構築している点に、「サクラ読本」の重要な特質があると考えられる。このような教材の体系化の方法を井上赳自身は「反復法」と呼んでいるが、こうした計画性の高い教育方法は科学的な言語習得法に近似しており、またそれを意識的に模倣・摂取したものだと考えられる。

なお、教材の体系化に関して付言すれば、この「古事記の話」は低学年における既習教材との縦のつながりを有する一方

で、前後に配置された教材とも強い横のつながりを有している。「古事記の話」の前に置かれた第十一課「皇國の姿」は記・紀神話を素材にして作られた韻文教材であり、また後に置かれた第十三課「松阪の一夜」は真淵・宣長の出会いを通して古事記研究の重要性を説くものである。「松阪の一夜」は第三期国定読本から存在する教材であるが、「サクラ読本」の新たな教材配列においてさらなる意義が付与されたと見ることができる。

ところで、細かいことではあるが右の引用文における「日本武尊」の表記には問題がある。というのは古事記におけるヤマトタケルノミコトの表記は「倭建命」であり、「日本武尊」は日本書紀における表記だからである。同様のことは「八岐のをろち」の表記についても言い得る。ヤマタを「八岐」と書くのは書紀の表記であって、古事記では「八俣」と表記されている。ヤマトタケルを「日本武尊」としたのは読本巻六の教材名にあわせたためであるが、この巻六・第六課の「日本武尊」の内容もどちらかといえば日本書紀が描くヤマトタケル像に近い⁸⁾。なお、教材名における「少彦名」「弟橘媛」も書紀の表記であって古事記の神名・人名表記とは異なっている。このように読本の神話・伝説教材が表記に限らず内容面に至るまで実は日本書紀に依拠している面が大きいにもかかわらず、当該「古事記の話」が日本書紀を無視してすべてを古事記に結び付けようとしている点は、学問的見地から問題とされなければならない。しかしこれを逆に言えば、「古事記の話」には日本書紀を隠蔽することで古事記を絶対化しようとするイデオロギーが内在しているということである。そのイデオロギーが続く第九段落で顕在化する。

その第九段落が「古事記の話」全体のまとめにあたるわけだが、この最終段落では古事記という書物の価値が声高に喧伝されることになる。

それは、要するに我が國初以來の尊い歴史であり、文學である。殊に大切なことは、かうして我が國の古傳が、古語のままに残つたことである。古語には我が古代國民の精神がとけ込んでゐる。我々は今日古事記を讀んで、國初以來の歴史を知ると共に、其の言葉を通して、古代日本人の精神をあり／＼と讀むことが出来るのである。

この箇所は、現在の眼から見れば最も問題を含む一節ということになる。神話・伝説を「歴史」としている点や、それを「尊い」という語で価値づけている点、また「國民」という語を用いている点などは、直ちに批判の対象となる。しかし、そうした目につきやすい諸点よりも問題となるのは、古事記をとらえて「古傳が、古語のまゝに残つた」ものとしている点である。これは「我が國の古語を、漢字ばかりで其のまゝに書きあらはすことが、安萬侶に取つての大きな苦心であつた」(六四六五頁)、「阿禮の語る所を、言葉其のまゝに文字に書きあらはすことが出來た」(六六六六七頁)という記述に対応している。実際には、歌謡と固有名詞を除けば本文の大部分は訓字で表記されている古事記を「古語のまゝに残つた」ものとは見なし難い。たとえば、上巻冒頭の「天地初發之時」という一句からして、決定的な訓讀が得られぬまま今日に至っている。つまり、「天地初發」という漢語を唯一の「古語」に還元することはほとんど不可能だということである。そのような古事記を「古語のまゝ」と見なす認識は本居宣長に由来するものである。

宣長は、古事記が「いさゝかもさかしらを加へずて、古より云々傳へたるまゝに記された」(『古事記傳』一之卷、古記典等總論)書物であり、「もはら古語を傳ふるを旨とせられたる書」(同一之卷、文體の事)であると主張する。しかし、この宣長の主張は自らの訓讀法の正しさに対する確信によつて支えられているものであつて、仮名表記が一部特定の語彙のみにとどまる古事記の表記の実態とはかけ離れている。「古事記の話」は、こうした宣長の古事記理解を理論的な枠組みとしていることがわかる。そのため、同じく「古伝」を伝えているはずの日本書紀の存在が隠蔽され、古事記だけが特権的に語られることになるのである。なぜなら宣長は「書紀は、後代の意をもて、上代の事を記し、漢國の言を以て、皇國の意を記されたる故に、あひかなはざること多かる」(古記典等總論)書物だと考えていたからである。しかし、「サクラ讀本」の神話・伝説教材が多く日本書紀に依拠している(「古事記の話」の直前におかれた「皇國の姿」の天壤無窮の神勅も書紀を典拠としている)ことを考えると、そこには明らかに矛盾がある。結局、この教材文の最大の問題点もこのあたりにあると考えられる。

なお、第九段落において、古事記が「尊い歴史であり、文学である」と述べていることも注目しておくべきであろう。既に第二段落（六三―六四頁）においても、先に引用した通り「尊い歴史も文学も」という表現が用いられていた。この「文学」という用語および認識は明治時代に西洋から移植した概念であり、宣長や篤胤の古事記理解とは異質な要素である。「古事記の話」が太安万侶の作業を重視していることと、古事記を「文学」として位置付けていることとは、おそらく対応関係を持っているだろう。また、ここに井上越の「文学」志向の反映を見るべきだと思われる。

教材文「古事記の話」の内容は以上述べてきた通りであるが、国語教材としての意図や意義については、さらに次節以下において検討を加えてゆく。

四 『小學國語讀本尋常科用卷十一編纂趣意書』の検討

前節に触れたように、この「古事記の話」は、古事記という書物を「尊い歴史であり、文学である」と両義的に位置付けていた。「尊い歴史」という位置付けは古事記の聖典化に向かうものであり、かつ歴史教育の範疇の問題でもある。津田左右吉に対する言論弾圧に見られるように、昭和十年代において古事記は絶対的「神典」であり、真実の「歴史書」でなければならなかった。従って「尊い歴史」という評価は動かすことができないものであったと考えられる。だが、そこへ「文学」という評価を付け加えるなら、古事記の絶対性や真実性を相対化するものともなりかねない。それでも敢えて「文学」という位置付けを与えたところに、国史や修身の教科書とは異なる国語読本としての主張がこめられていると見るべきだろう。

先にも引いたが、井上越は「英國をはじめ獨逸・佛蘭西が、小學讀本に於て大體自國文學の史的展開にまで編纂を擴充し、古典文學を上級の教材としてゐるのは、まことに羨むべき状態である」と述べていた。この文章が発表された段階ではまだ

「サクラ読本」の巻十一・十二は刊行されていなかったが、彼が羨んだ英・独・仏の教科書に倣って「古典文學を上級の教材」とすることを實現することになる。平家物語や太平記を典拠とする教材は以前から存在していたが、「サクラ読本」では、先に挙げた「源氏物語」（巻十一）や「萬葉集」（巻十二）のほか、「雪の山」（巻十・第十七課）で枕草子を、「見渡せば」（巻十一・第二課）で古今集を、また「末廣がり」（巻十二・第九課）では狂言を採り上げて教材化しており、「古典文學」重視の方針が窺える。井上は戦後の回想談においても「古典的名作を、せめて児童の読み得るものにして出したところに、私がかつて英国で学んだ国語教育における古典の尊重の精神の一端を果たしたつもりであります⁽¹⁰⁾」と言明している。こうしてみると、教材「古事記の話」の掲載には、古事記を「自國文學」「古典文學」として位置付ける意図が強く作用していたと考えられる。

そこで、教材の意図をさらに詳しく探るべく、文部省による『小學國語讀本編纂趣意書』を検討してみることになろう。巻十一の編纂趣意書（昭和十三年五月）⁽¹¹⁾を見ると、巻十一全体の趣意については、

巻十が國民精神の諸相を具現することを以て編纂の主題としたのに対し、本巻は、かゝる國民精神を基礎として、抑も如何なる國民文化が顯現したかといふ見地に立つて、主として國民文學を中心とし、國民思想及び文化に關係ある教材を選び、これを中軸として編纂したものである。
(三頁)

と記されている。そして「古事記の話」については「説話的の形を持ちながら内容は文化史的な論説である」（二頁）と述べ、さらに、

思想的方面からすると、前課（引用者注・「皇国の姿」）と密接な關係を持つが、本教材の主題とする所は、「源氏物語」の前段と同じく、古事記の文化史的な觀察にある。殊に古語と文字の關係が中心であり、其の点で「源氏物語」の假名文字と歴史的なつながりを有する。更に内容方面からすると、本課は巻四・五・六に出てゐる神話・歴史の説話と結ぶ所が深い。此の教材に於て、要点を専ら古事記の編纂事情、及び文字言語に限り、内容を客としたのは、巻四乃至巻六の

さうした教材を豫想するからである。

(二七―一八頁)

と述べている。すなわちここでは古事記が「國民文學」および「國民文化」として位置付けられていることがわかる。そして教材の「主題」は、古事記の「思想」や古事記の「内容」ではなく、その「文化史的」な位置付けに置かれているというのである。それは具体的には「文字言語」の問題であるという。つまり、この教材の眼目は古事記の言語的特性の理解にあり、また古事記の言語史的位置付けにあるということである。そして読本編纂者が古事記を「書かれたもの」としてとらえ、それを歴史上に定位する意図を有しているからこそ、「古事記の話」においては太安万侶の営為が重視されるのであり、かつ「和銅五年正月二十八日」という具体的な日時がわざわざ記されるのだと考えられる。

また、右の引用文中で言及されている第四課「源氏物語」の前段には「假名文であればこそ、當時の國語を自由自在に使用つて、其の時代の生活を細かく寫し出すことが出来たのです」(一五頁)とある。従つて、ここで構想されている「文化史」とは、具体的に言えば漢字による和文表記(古事記)から仮名文(源氏物語)へという表記史および文体史的展開であることが窺える。このように「サクラ読本」の編纂者には古事記を「文學」そして「文化」として歴史的に位置付けようとする意図があることが明らかとなったが、その「文學」ないし「文化」の本質にかかわるものとして「文字」という言語の問題を提示しているこの意味は決して小さくないと思われる。つまり、古典Ⅱ文化教材たる「古事記の話」は、その本質において言語教育教材たる一面を有しているということである。次節においてさらにその点を追究してみることになしたい。

五 「古事記の話」の言語教育的側面

「古事記の話」と同じく読本卷十一に掲載された教材「源氏物語」は作者紫式部の紹介から始まる。そこでは紫式部が「文

學の天才」と呼ばれており、また「漢文」ではなく「假名文」を選択したからこそ「生活を細かく寫し出すことが出來た」と評価されている。ところで、「古事記の話」では、太安万侶の表記の工夫によつて「言葉其のまゝに文字に書きあらはすことが出來た」と語られていた。この安万侶評価と紫式部評価は明らかに同様の論理によつているが、ここで文字表記の選択が評価の規準となつている点を注目しておきたい。安万侶や紫式部を評価すること（すなわち古事記や源氏物語を「文化」として評価すること）が、必然的に漢字（訓字）と仮名文字の差異を認識させることにつながり、また音声と文字の差異を認識させることにもつながるとするのが、これらの教材文の意図としてあるのではないだろうか。

国語を学習してゆく上で、音声言語と文字言語の違いを認識することはきわめて重要な課題であると思われる。また、漢字・カタカナ・ひらがなという複数の文字体系を併用する日本語文の特質に対する理解・認識を深めることもまた国語教育にとつて重要な課題である。教材「古事記の話」には、現代日本語に対する認識を深めるための教材という側面もあると考へらえる。

「古事記の話」第五段落では、先にも引いた通り「試みに、今日若し片假名も平假名もないとして、漢字ばかりで、我々の日常使ふ言葉を書きあらはさうとしたら、どうなるであらう」と問いかけ、古事記の表記という問題を現代語の問題に置き換えて考えさせようとしている。当時発表された指導案には見られないが、この箇所は「クサキハアライ」以外にもさまざまな例が考えられるところであり、発展的な学習を試みる事が可能である。いろいろな日常の言葉を生徒に挙げさせ、またそれをどのように漢字表記したらよいか生徒に考えさせるという学習活動が行われれば、教材の意図はさらに深められるであろう。そのような思考実験を通して、漢字とひらがな・カタカナの違いを実感し、かつそれらの文字を併用する日本語表記の特質を再認識することができると思われる。要するに、安万侶の「方法」を理解することは、古事記という書物の性格を理解するにとどまらず、日本語の文字表記に対する理解を深めることになるということである。

さて、先に述べた通り「サクラ読本」は文学志向が強い国語教科書と言われてきた。当時、国語教科書の文芸主義を批判

し「言語活動主義」を提唱していた西尾実⁽¹²⁾は、昭和八年ごろ、井上越に対して「こんどの読本は、国語教育界の待望に応えた編集ぶりであることはよろこばしい。しかし、その一般的性格は、文芸読本たる点に認められる。が、もつと、日常的な、もつと一般的な言語活動を学習させる読本こそ、来るべき国語教育の教材でなくてはならぬと思う」と直言したという⁽¹³⁾。この西尾の提言が影響したのか、もともと井上自身にそういう考えがあつたのかはわからないが、昭和十六年に発表された井上の文章を見ると、かなり言語主義的な立場を表明していることがわかる。井上は「内容主義」や「文藝教育」を批判し、「こ⁽¹⁴⁾とばの教育の重視」を強調している。井上の言う「文学」が実践的な言語活動も含む幅の広い概念であることは先述した通りであり、「サクラ読本」を狭い意味での「文芸読本」と決めつけることは不当であると言わざるを得ない。公表された論説を見る限りでは、井上の国語教育理念は決して西尾の理論と対立するものではないと考えられる。

井上は「古事記の話」について解説を書いているが、そのなかで「要するに此の教材の第一は、国語と國字の問題にふれてゐることである」と言い、「本課は、國語と文字、國語と思想といふ觀點から、國語そのものを認識する上に重大意義を持つた教材であるといはねばならない」と述べている。これは井上が「古事記の話」にこめた言語教育教材としての意図を自ら解説しているものと見てよいだろう。

なお、「サクラ読本」の編纂とほぼ同時期に、いくつかの漢字制限案・漢字整理案が文部省内の調査会・審議会によつて答申されていたことも付け加えておきたい。昭和六年には常用漢字表（大正十二年発表）の修正が行われ、昭和十二年には漢字字体整理案が答申されており、実効性や社会的影響はほとんどなかったとはいえ、国語國字問題が重要課題として認識されていたことは窺える。「古事記の話」が喚起する文字の問題は、その当時における現代的課題であつたことも注意しておくべきであろう。

むすび

西尾実は近代国語教育の歴史を区分して、昭和十年前後に「文学教育期」から「言語教育期」へと転換したと論じている。⁽¹⁶⁾既に触れたように西尾は「サクラ読本」を「文芸」的と見ていたようであるが、大局的に見れば「サクラ読本」もまた西尾の言う言語教育期の一翼を担っていると見てよいのではないだろうか。⁽¹⁷⁾教材「古事記の話」に認められる言語教育的な意義は、「サクラ読本」の歴史的な位置にもかかわるものと思われる。

「文学教育」か、「言語教育」か、という国語教育をめぐる古典的な問題は、いまなおアクチュアルな問題としてあり続けている。文学教育であることと言語教育であることが対立せず一致する地点にあるものとして、「古典教育」をポジティブに捉え直すことができるのではないだろうか。国定教科書は、時代ゆえの大きな制約と限界に直面していたが、そこには普遍的な問題提起もなされていたことを見逃してはならないだろう。単純な反動化や国粹主義への回帰とならないためにも、古典教育の現代的意味をつねに考える必要がある。国定教科書における「古事記の話」の言語教育的側面の限界と可能性とを見極めることで、そこから新たな国語教育のあり方を模索する手がかりを見つけていきたいと考える。

注

- (1) 井上超「小學國語讀本編纂史」(『岩波講座國語教育』岩波書店・昭12)。以下同じ。
- (2) 井上敏夫「概説」(『国語教育史資料第二巻 教科書史』東京法令出版・昭56) 一四頁。
- (3) 有働裕「源氏物語」と戦争」(インパクト出版会・平14) 一九頁を参照。
- (4) 國語教育學會編『小學國語讀本綜合研究 卷十二』(岩波書店・昭14) 一六八頁(大野静「指導」)。
- (5) 後藤金好「古事記の話」(尋六 六月の讀方) (『教育国語教育』8巻6号、昭13・6) 四六頁。
- (6) たとえば、当時の代表的な注釈書を見ると、次田潤「古事記新講」(明治書院・大13)は、阿礼が難しい訓詁を記憶していったと解する(八頁)が、中島悦次「古事記評釋」(山海堂出版部・昭5)は、稗田氏がもともと古伝・古語を伝誦していたと解する(一〇頁)。
- (7) 井上超著・古田東朔編『国定教科書編集二十五年』(武蔵野書院・昭59) 四三頁以下。

- (8) 棚田真由美「昭和戦前期小学校国定国語教科書における『古事記』の教材化に関する考察」(『国語科教育』49集、平13・3)を参照。
- (9) 拙稿「文字の倒錯」(『文芸と批評』9巻4号、平13・11)を参照。なお本稿の古事記に対する基本的認識は当該拙稿に述べた通りである。
- (10) 注7前掲『国定教科書編集二十五』四四頁。
- (11) 文部省編纂『小學國語讀本尋常科用卷十一編纂趣意書・小學書方手本尋常科用第六學年上編纂趣意書』(日本書籍・昭13)
- (12) 西尾實「文藝主義から言語活動主義へ」(『岩波講座國語教育』岩波書店・昭11)、西尾『國語教育の新領域』(岩波書店・昭14)
- (13) 西尾實『國語教育の構想』(筑摩書房・昭26)二二頁。
- (14) 井上越「國民科國語の指導精神」(『國語文化講座第三卷 國語教育篇』朝日新聞社・昭16)
- (15) 注4前掲『小學國語讀本綜合研究 卷十一』一六三頁(井上越「要説」)。
- (16) 注13前掲『國語教育の構想』第一篇・國語教育の問題史的展望
- (17) 竹本伸介「サクラ読本における語法事象の考察」(『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』5巻、昭54・10)を参照。